

[中耳炎]

子どもに多い中耳炎ですが、そのままにしておくと慢性中耳炎になることも。すると、大人になっても聞こえが悪いままに…。中耳炎はきちんと完治させましょう。

イラスト/さのまきこ 取材/橋内美佳 編集協力/森田侑季慧

教えてくれたのは

笠井 創先生

笠井耳鼻咽喉(いんこう)科クリニック自由が丘診療室院長。千葉大学医学部を卒業後、千葉大学医学部大学院修了。千葉労災病院や国立がんセンターなどを経て、現職。



「健診で初めて聞こえが悪いということが気づきました…」

子どもに多い 急性中耳炎と滲出性中耳炎

「中耳(下記参照)に炎症が起きるのが、文字どおり中耳炎です」と笠井創先生。

中耳炎は大きく3つに分けられますが、いちばん多いのは急性中耳炎で、「ほとんどは子どもに発症します」。原因は風邪などによるウイルスや細菌、のどや鼻にいるウイルスや細菌が、耳管を逆流して中耳に感染するのです。「大人がかかることもあります。子どもは耳管が短いため、ウイルスなどが到達しやすく、抵抗力も弱いため、中耳炎にかかりやすいのです」。

急性中耳炎になると、耳が痛み、耳だれが出たり、聞こえが悪くなったりします。次に滲出性中耳炎ですが、これも子どもも多く、「中耳に液体(滲出液)がたまっていく状態の中耳炎です」。急性中耳炎が治りきらずに滲出性中耳炎になったり、急性中耳炎にかかった子どもが滲出性中耳炎を繰り返すこともあります。

「耳鳴りや耳が詰まる感じがしたりしますが、痛みはほとんどなく、子どもは症状を訴えないので気づきにくいのです。乳児なら耳をよくいじる、ぐずついでよく泣く、幼児なら家族の声に反応が遅い、集中力が低下、テレビの音を大きくして聞くなどしていたら滲出性中耳炎を疑って」。

急性中耳炎と滲出性中耳炎の治療には、風邪や、鼻、のどの症状を抑える薬や抗生物質、中耳にたまったうみや滲出液を出し

やすくする薬などが処方されます。「鼓膜を切開することもありますが、鼓膜は再生能力が強いので心配しなくて大丈夫です」。また、滲出性中耳炎は自然によくなる場合がほとんどですが、「小さいころの聞こえは言語の発達に影響を及ぼします。特に鼻やのどの悪い子は注意してください」。

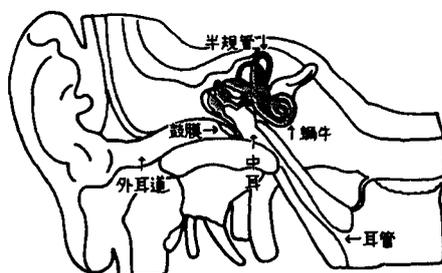
子どものころの中耳炎から慢性中耳炎になることも

慢性中耳炎は大人にも多く、「急性中耳炎が3カ月以上治りきれないで、慢性化した状態です」。急性中耳炎になると、うみを外に出そうとして自然に鼓膜に穴があくことがあります。ところが急性中耳炎を繰り返したり、治療を中断していると、「鼓膜の穴があいたままになってしまいます」。

もちろん聞こえは悪いのですが、「本人はそれがあたりまえの状態になっているため、気づかないでいることも多いのです。ですから、大人になってから健康診断などで検査を受け、そこで初めて慢性中耳炎だったということがわかる場合も少なくありません。そうならないためにも、急性中耳炎を完治させておくことが大切です」。

慢性中耳炎の治療には抗生物質が処方されますが、「ケースによっては鼓膜形成術という手術を行なうこともあります。病院によっては日帰り手術として行なわれることも多くなっていますので、以前に中耳炎を繰り返したり、耳の聞こえの悪さが気になっている人は受診してみましよう」。

●耳の仕組み



耳は、外側から外耳、鼓膜、中耳そして耳管という管を通して鼻やのどのほうへつながっています。まん中の中耳の部分に炎症を起こすのが中耳炎です

●夏は航空性中耳炎に注意

一般的に中耳炎が多いのは、風邪などが蔓延する秋口。春先ですが夏にも多い中耳炎もあります。夏休みの旅行で飛行機を使う人に起こる、航空性中耳炎です。機内の気圧の変化によって鼓膜の内側と外側の気圧に差ができて、炎症を起こすのです。パイロットやキャビンアテンダントに多いタイプの中耳炎ですが、飛行機に乗る前の予防も効果的なので、経路のある人やアレルギー性鼻炎、風邪を引いて副鼻腔炎などを起こしている人は病院で相談することをおすすめします。

